
即興小説傑作集第二弾

物書き魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

即興小説傑作集第二弾

【Nコード】

N4756B

【作者名】

物書き魂

【あらすじ】

出された単語を使用して即興小説を書こう、そんなスレッドが「小説家になろう」秘密基地」に存在する――絶対に使用しなければならぬ単語は三つ、文字は1000文字までという極限の制限の中で生まれた豊かな作品集です。

冬の日…（前書き）

この作品は、「小説家になろう」秘密基地」掲示板の「即興小説を書こう！」スレッドから生まれました。全ての著作権は作者様に属します。

今回の参加者さま

- マグロ頭さま (W6336A)
- AKIRAさま (W7052A)
- yoshinaさま (W6246A)
- 更紗ありさま (W3245A)
- 影之兎チャモさま (W6270A)
- 松原志央さま (W5773A)
- ともゆき様 (S0003A)
- 和成創一さま (W8588A)
- ゆうな様 (W4620A)

作者名は各作品の冒頭に設置されています。

今回はテーマごとに作品をまとめました。この章のテーマは「冬の日…」。

季節によって、物語は形を変えます。春には春のドラマが、夏には夏のドラマが、秋には秋のドラマが、そして、冬には冬のドラマが……。

冬の日に…

マグロ頭

「雑巾」「腹」「チケット」

彼女から何かを貰った。いや、押し付けられた。

夕暮れ時、幼馴染みの彼女を見つけた。声をかけたら、鼻っ面に何かを投げつけられた。驚いた僕を尻目に彼女はそそくさと立ち去っていく。

「何なんだよ……」

「何なんだろう……」

投げつけられた物の前に座り込んで、外で呟いた言葉と一文字違いの言葉を呟いてしまった。そんなに大きくないそれには、とつくに過ぎてしまったクリスマスの包装がしてある。

何時準備したのだろうか。

とにかく開けてみる。中にあったのは……

「雑巾？」

それも使い古された年代物。妙に味がある。でも、何故に雑巾？ 雑巾の中から手紙が出てきた。直筆の手紙を手にとる。

『メリークリスマス。直人は風邪引きやすいからプレゼントです。あんまりうまく出来なかったけど、一生懸命作りました。これでお腹を冷やさない様にしてください』

な、なんと！

この雑巾は腹巻きだった。裁縫が死ぬほど嫌いな彼女が苦心のすえに完成させたのだらう。暖かな気持が僕を満たす。

そうだ、今度遊園地のチケットを送ろう。

雑巾……いや、腹巻きをぎゅっと握って、そう決心した。

AKIRA

「お菓子」「城」「季節外れ」

昔、ある国にある猟師がいました。

「やばいなあ…。もうすぐ日が暮れちまう。その前にこの山を降りないとな」

山に遭難してどの位の時間がたったのだろうか。いつも猟で慣れているとふんで、荷物をかなり少なく持って山に入ったのだが、いつの間にか獣道に入ってしまったのか、どこにいるのか分からなくなってしまうた。

しばらく歩き続けていると、前に建物らしき物が見えた。

「やった！助かった！」

駆け寄って行くと猟師は立ち止まった。

「なんだこりゃ？」

その建物はお菓子で出来たお城でした。

周りは雪の様なかき氷、上にはアイスとプリン、そして果物やクリームでデコレーションされている。

「すごいな。初めて見たぜ」

しばらく見とれていた猟師が口を開く。

「でも、どう考えても季節外れだよな…」

それはある冬の物語。

松原志央

「鍵」「ライブ」「色彩」

「よーりっ。早く行くよお？」

「しいちゃんってば待ってよう」

普通、こんなにうるさかったら怒る兄も今日は何も言わずに私を見送ってくれる。

兄も初めての時はワクワクしたものだ、と語っていた。だからかは知らないけど、今日の兄はちょっぴり優しかった。

「じゃあ、頼もう行くね？」

「ああ。気を付けて行ってきな。あと、これ」

「あ。忘れるところだった！ありがとう、お兄ちゃん！」

渡されたのは家の鍵。兄は私を優しく見ながらこう言った。

「いいってことよ。初ライブは誰だってワクワクするもんだからな。

……でも浮かれ過ぎて事故ったりするなよ？」

「うん！」

私は、色彩多き賑やかな街を、親友の詩織と一緒にコンサートホールまで歩いていった。

私は初ライブへの期待とちょっぴり優しかった兄に上機嫌だ。

ゆうな

「パソコン」「リップクリーム」「ベランダ」

寒い日が続く。

私は暖かい部屋の中で、パソコンにしがみついていた。

冬なんて大っ嫌い。寒くて露出は出来ないし、うなじも見せられないし。真っ赤な唇は青くなるし、乾燥してがさがさになるし。せつかくの私の美が全て台無し。

リップクリームをたっぷり塗りながら、私はキーボードを弾く。

『お昼ご飯買ってきて』

返事はすぐに返ってきた。

『またー！？たまには外出なよ』

瞬時に返す。

『嫌。お腹すいたの！早く。あたしをコロす気！？』

『：分かったよ、もう。すぐに行くから』

『ついでの飲み物もねー早急に！』

それだけ返すと、パソコンを閉じ、鼻唄まじりに化粧をする。

そうこうしているうちに、外でバイクが止まる聞き慣れた音がした。ぱっと立ち上がり急いでベランダに出ると、両手にスーパールの袋を持った彼が、雪空の下、寒そうに立っていた。

自然と顔が緩む。北風も雪も、今は全く気にならない。

私をこんなにも寒がりにしたのはきつと、本当は毎日でも君に来て欲しい、アマノジャクな私の女心。

07年お正月（前書き）

昨年から始まった即興小説スレッド。皆様のご協力のお陰で、なんと年を越すことができました。この章はその頃の即興小説です。どうやら、小説の世界にもお正月は来たようです……。

07年お正月

松原志央

「猪」「黒豆」「命綱」

どうやら今年は猪年（亥年）らしい。干支にはあまり興味がなくて気にしていなかったし、覚える気もなかったから猪があるなんて、ちょっと以外だった。

これは、妹がおせちの黒豆を摘みながら、テレビの命綱だけを使い高い場所に上る人を中継すると言う有りがちなバラエティ番組を俺と一緒に退屈に見ている時に教えてくれた。

「頼ね、今年が年女なんだよー！」

「年女……？」

「お兄ちゃん知らないの？」

「ああ」

「あのね……」

とまあこんな感じだ。どうやら俺は馬年（午年）生まれらしい。約5年まえ年男だったらしい。

俺は黒豆を摘みながら後何年子供として正月を迎えられるか勘定した。

影之兎チャモ

「駅伝」「お茶」「日の出」

正月ほどテレビ番組がつまらない時期はないと思っていた。

取り合えず、茶の間に映される駅伝。観ていても、なんでこんなにつまらないのしかやらないんだという愚痴しか浮かばない。

なにが悲しくて人が、しかもムサ苦しそうな男が走っているだけの映像を流し続けるんだろうか。これは何かの拷問だろうか。日本人は皆マゾなんだろうか。

俺は仕方なしに、本日何杯目になるか分からないお茶を汲もうと腰をあげた。

と、その時だ。

一緒にテレビを見ていた親父が、おおっ！ と、声をあげた。

「道路に裸の美女が飛込んできたぞっ」

「な、何ィ〜！？」

すぐさまテレビに目をやるも、そこには既に美女はおらず。代わりに日の出の静止画に「しばらくお待ち下さい」というテロップが添えられていた。

俺がその年から駅伝を欠かさず観るようになったのは言うまでもない。

ゆうな

「しめ縄」「鏡餅」「おとそ」

「あかきたな、はまやらわ」

正月気分が抜けず、昼まで寝ていた僕の耳に入ってくる妹の声。

「いきしちに、ひみいりい」

もそもそと起きてリビンググへ向かう。

「うくすつぬ、ふむゆるう」

ここ2、3日、僕の妹はこればかりを練習している。

「えかせてね、へめえれえ」

隣では鏡餅の残りを食べているじいちゃん。

妹は最後の『ん』を言いたくて日々頑張っているのだが……。

「おとそと……おとそこ……おこ、と……」

いつもここで詰まる。小さな口を突きだし必死で頑張る妹が可愛いくて、この日僕はつい吹き出してしまった。

——次の瞬間、怒った妹の巨大な泣き声が家を揺らし、玄関に飾ったまま忘れられていたしめ縄を落とし、じいちゃんの咽に餅を詰まらせた。

残っていた正月気分も一気に抜けていった。

ゆうな

「日常」「初夢」「傘」

今年、私は初夢を見ただろうか。

ふと、そんな疑問が頭に浮かび、そしてすうっと消えていった。

目的もなく一人フラフラと歩いていた。暖かい陽射しが降り注ぎ、時間がゆったりと流れていた。

と、向こうから濃い水色の傘が、上下に揺れながら歩いてくる——そう錯覚するくらい小さな少女が、傘からひよっこりと顔を覗かせた。側まで来ると、くりっとした大きな目で私を凝視し、少女はたどたどしい口調で突然叫んだ。

「もうじきあめがふってくるよ!!」

こんなにも晴れているのに？

私は空を見た。

その瞬間、空から滝のような勢いで水が流れ落ち、全てを飲み込んで行った。必死でもがく私を、水色の傘を船にしてぷかぷかと浮く先ほどの少女が、楽しそうに笑っていた。

非日常的な出来事に対応出来なかったのか、泳ぎは得意なはずの私も、次第に荒れ狂う海の底に沈んで行った。

——はっとして目を覚ますと、遊びに来ていた幼い姪が私を覗きこみ、大量のよだれで私の顔を濡らしていた。

こたつでウトウトしたせいかな、今年の初夢は最悪なものとなった。

和成創一

「日常」「初夢」「傘」

「これは夢だ」とはつきり自覚できる夢がある。

俺の場合、それが初夢に訪れた。

よりによって世界で一番大事にしている“傘”をぶっ壊してしまつたところから始まるのだ。

さらに夢は、この傘をくれた初恋の女の子の声で俺に追い討ちをかけてくる。

「そんな人だなんて知らなかった」

俺は平身低頭、考えられるありとあらゆる手段を用いて彼女の気を引こうとした。夢と自覚している分、恥や外聞を気にする必要はない。全身全霊、一所懸命、一意専心……

で、目が覚めて思い出す。そういえば初めて声をかけられた時の台詞も同じものだったと。

すでにその子と“恋人”であることが日常を乗り越してマンネリ
になっている今、俺はお節介な初夢に心から感謝した。
「初心忘れるべからず」

決断のとき（前書き）

人には、決断の瞬間が大小様々あります。時にそれは、思いがけない結果を招くものです。その瞬間に身を委ねるとき、そこにはなにが待っているのでしょうか。

決断のとき

ゆうな

「トイレ」「ケーキ」「ありんこ」

「ありんこー!!」

「あんまり遠くに行ってはいけないよ」

「はい」

「かわいい娘さんですね」

「ありがとうございます」

「今日はお二人で公園に遊びに来たんですか」

「はあ、家が近いもんで」

「優しいお父さんで羨ましいわ」

「たまの休みくらい遊んでやらないとね」

「最近、幼女誘拐殺人事件てのが流行ってるでしょう」

「物騒ですね、…あれ私の子はどこへ行ったんだろう」

「あなたもお気を付け下さいね」

「あ、あんな所にいたいた。ハハ、うちは大丈夫ですよ」

「ねートイレ行きたいよ」

「じゃそろそろ帰ろうか」

「おとなしくしてたらケーキいっぱいくれるって本当??」

「ああ本当だよ。おとなしく私の家までついてきたらね………」

幼女連続誘拐殺人事件の犯人の男は、見知らぬ少女の手を引きながらにたりと笑った。

ともゆき

「天気」「理想」「飛行機」

私はその飛行機で彼女の元に向かっていた。

そう、今日私は彼女にプロポーズをするためにその飛行機に乗ったのだ。

おそらく彼女からはYESの返事をもらう事ができるだろう。私にとっては彼女は理想の女性だったし、彼女にとっても私は理想の男性であろう。

彼女とは幸せな結婚生活を気づきたいものだが、結婚生活と言うものは決して順風満帆と行かない事だってあるだろう。

今日の天気と一緒に。地上は雨だというのにこの雲の上は穏やかな晴天である。しかし、終わらない雨はないはずである。必ず彼女と幸せな、理想的な家庭を築きたいものだ。そう考えると自然と笑みがこぼれてきた。

「…お客様、間もなく到着ですよ」

客室乗務員が私に話しかけてきた。

その顔を見た私は言葉に詰まってしまった。

「…どうかなさいました？」

「い、いえ、何でもありません」

その客室乗務員が彼女に似ていたのだ。

ゆうな

「白紙」「大会」「滝」

約束を交した。この大会で俺に負けたら、奴は二度と彼女に手を出さない。

約束を交した。この大会で奴に勝ったら、彼女はもう一度俺を信じてくれると。

「今の私は貴方を信じきれない」

俺は彼女が好きだから、走る。

「白紙に戻しましょう…」

奴なんかに邪魔はさせない。

「けど貴方が好きな気持ちは変わらないから…」

滝のように吹き出す汗、絡まる足、息も上手く出来ない。けれど俺は走る。彼女ともう一度笑い合うために…

すぐ隣では奴が走っている。絶対負けない！！その強い思いを抱えたまま、俺は最後の直線突っ切った。

大の字になり必死に呼吸し空を仰ぐ俺の視界が、彼女の影で遮られた。死にそうな俺を覗き込む彼女は、輝く満面の笑みでこう言った。

「貴方が一番よ」

——八歳、青春真っ只中のマラソン大会。

マグロ頭

「鉛筆」「テレビ」「ピアノ」

実家に帰って掃除をしていたら、中学の頃の文集が出てきた。個人で自由に使っていたいい頁には、自由きままに、夢とか想いとかが綴ってある。懐かしいみんなの事が思い出された。

鉛筆で空を描いてやる！

そう書かれた頁で手が止まった。背が高くて筋肉質で、でも絵が抜群に上手かった花山くん。彼との思い出はいつもオレンジ色だ。

今もどこかで空を描いているのだろうか？

『始めっから諦める必要なんてないんだ。誰がなんと言おうとも自分が納得した道を歩けばいい。オンリーワンが良いわけじゃないけど、それも素晴らしいと思うよ』

私が全く身動きがとれなくなってしまった時、何も言っていないのにそう言ってくれた。夕暮れに染まる道に私の涙が溢れたこと、頭に置かれた、いかつくて大きくて温かった花山くんの掌。どちらもはつきり覚えてる。

はつきりここにあるから、私は前を向いて歩いていける。

幼い頃からずっと触れてきたピアノ。そして今の私の原点。誰かに伝わる音色を目指して私は歩き続ける。

花山くんに負けないように。

ずっと点けていたテレビを消して外を見た。鮮やかな夕焼けがとても綺麗だった。

ゆうな

「炎」「仕事」「ラジオ」

私が仕事ばかりして家にいないのはお前達家族のためだ。それも解らず、やれ子供の世話をしろだの、やれ遊園地に連れて行けだの言うんじゃない。

今日も急いで会社に戻らなくてはならず、めったに運転しないのになんかやって車をハイスピードで走らせている。すでに深夜0…00を回っていた。こんな時間に、とグチグチ文句を言っていた妻子も、もうとっくに眠ったことだろう。私はラジオでニュースを聞きながら、頭の中では仕事の事でいっぱいだった。

だからだろうか。今、そのラジオから信じられない言葉が聞こえたような気がしたのは…。

たった今火事が発生した。二階からは女性と子供が助けを求め叫

んでいる。

——住所は…私の家だ！

そんな馬鹿な！！

頭が真っ白になったその瞬間私は、前から来ていたトラックに気付かず、真正面から突っ込んで行った。

炎に包まれた車内で、まだかろうじて情報を吐き出していたラジオが、妻子が無事救出された事を私に伝えた。

安心した私は、微笑み静かに目を閉じた。

翻弄（前書き）

人は時に二種類に分かれます。翻弄する者と、翻弄される者です。転がす者、転がされる者。あなたはどちらになりたいですか？

翻弄

マグロ頭

「眼鏡」「猿」「箒」

ある所に何でも願いを叶えてくれる魔女がいました。

晴れた日の事でした。彼女の所に、一人の青年が訪ねてきました。

「何でも願いを叶えてくれると聞いてます」

礼儀のある、しっかりした青年です。爽やかな人物でした。しかし、彼女はその青年をいつもの様に扱いません。分厚い眼鏡をかけて、マスクをし、トンガリ帽子を被って相手をしています。異様な容姿でした。

「ええ、私が何でも叶えて差し上げましょうぞ。して、どんな願いかね」

声色まで変えています。いつもの透き通った、軽快な声ではなくて、萎れた老婆の様な声です。その声に使い魔の猿魔は笑いを堪えるのに必死でした。

「僕は同僚の静香さんと付き合いたいのです」

はきはきとしたその願いに、彼女は勢いよく立ち上がりました。

衝撃で立掛けてあった空飛ぶ箒が倒れました。

「ならん。その願いだけは叶えとうない！」

「えっ、ちょっと、何故ですか！」

「ならんならん。どうしても駄目じゃ！」

「何故です！ 理由はなんなん——」

「ええい。駄目って言ったたら駄目なの！」

そう言って彼女は、静香さんは変装をといて、真っ赤な顔で叫んだのです。

和成創一

「時計」「セロハンテープ」「チョコレート」

好きだったり、得意だったりするけど一方では苦手というものが、人には時々ある。

僕の妹も、友達を作るのは得意だが内心では人付き合いは苦手だ
と思っているタイプである。

さらに言えば甘えられるのは好きだが甘えるのは苦手。

手先は器用だが根気の要る作業は苦手。

ガムテープで貼るのは得意だがセロハンテープで貼るのは苦手――
ってこれは違うか。

だが、何にでも例外はあるものである。

「あらあら。紗枝ったら、お兄ちゃんの誕生日プレゼントがそれ？
相変わらず冷めてるわねえ」

そこらに転がっている空箱をセロハンテープで目張りした容器に
入っているのは、几帳面なほど形の整えられたチョコレート。

ちなみに僕は甘いものが苦手である。

「後で礼を言いにいかなきゃ。きつと待ってる」

「ふふ。そうね。今もそわそわしてるんじゃないかしら。素直じゃ
ないんだから」

洗濯物を干す母さんの背中をうなずきながら、僕はこりっ、とチ
ョコレートをかじった。

手作りのビターチョコレートは、これでもかというほど苦かった。

ゆうな

「証明写真」「目覚まし時計」「ガム」

「げ」

言ってそろりと右足の裏を覗き見た。：やっぱり。靴の底と地面をガムがのびていた。最悪な気分では家に帰った。

家にはテレビだけがぼつんとある。スイッチを入れると、雑音と共にニュースが流れた。

「：には：だ：：：ます」

必要な部分だけを聞き分けると、つまりこういう事らしい。

就職の面接に落ちた男が面接官を刺してしまった。そして履歴書を持ち逃走したが、途中写真がはがれ落ちてしまい、男が捨てたらしき履歴書だけが発見されたらしい。

：なんともまあややこしい事件だな。

けれどその証明写真を見つけた人には礼金が出るそうなの。：これだけあれば、当面は生きてゆけるのに：

私は朝早く起きるのが苦手で、遅刻ばかりし会社を首になった。

目覚まし時計の音も聞こえず意味がない。：もうずいぶんと昔の事だ。

さて、と腰をあげて一足しかない靴についたガムをとろうと靴を裏返した。

……——あ？

この間とは違って、私はるるん気分で街を歩いていた。まさか踏んだガムが家路の途中で犯人の証明写真をくっつけていたとは。

私は爆音になるという目覚まし時計を買った。

松原志央

「携帯電話」「小説家」「陸上」

「もう、締め切りは一週間後ですよ？！何考えてるんですか！また仕事減りますよ！……え？仕事ならまたくるさ？」

携帯電話の向こうから聞こえてくる憎いほど綺麗で低くて色のあ
る声。

「貴方それでも大人気小説家なんですかああ？」

『……多分』

奴、三谷收藏みたにしゅうぞうもとい、本名三谷金治郎は若手の小説家で、わずか
一年でサスペンス・ミステリー界では知る人ぞ知る超大物小説家
である。

また、その容姿から女性からの支持率も多くある。陸上部に入っ
ていたらしく、ハツグンのスタイルだ。

しかし、性格は最悪。口癖は「多分」「ダルい」「嫌だ」と仕事
をするのが面倒くさい奴なのだ。

そのせいでこの一年間私がの担当になってからずっと困らされて
いる。

溜め息をついた。

「はあ」

『なんだ？』

「私は毎回貴方に困らされるのですよ」

『頼より』

奴はなぜか私を名字でなく名でよぶ。

「なんですかあ」

『俺はお前をこの手で困らせるのが一番楽しみだ』

「はぁ？Sですか」

『……クク』

携帯電話の向こうで奴が笑った。

「……どうしたんですか」

『明日、原稿取りに来い。……馬鹿かお前は。もう出来ているんだ』

「え？とりこし苦労じゃないですか！」

『クク……しばらく長く話したかったんだ。最近会ってないからな』

「はぁ？どういう意味ですか」

『その内教えてやる。……この激ニブが』

プツッ

「え？……はぁ」

私は電話を切った。なぜかにやける自分がいた。

和成創一

「秘密基地」 「キーボード」 「ハサミ」

『樹上生活者に愛のハサミを!』

キーボードを叩く手が思わず止まる。

誰だ、こんなステキなコメント残す野郎は。気になるじゃないの。私は己が心が導くまま、そのステキ野郎のHPへ移動する。

まさに秘密基地にぴったりの見事な樹上ハウスともっさもさの男が写った写真が現れる。クリックするとさらに次の写真へ。

もさ男がハウスから少し離れた枝になっている実を取ろうとしている。幹に足をかければ簡単に取れそうなものを、もさ男はあえてハウスから身を乗り出して取ろうとしている。確かにハサミがあれば解決しそうだが……万事この調子だと愛ではなく悪意を感じる。

加えてその様子は実に数十枚に渡る連続写真で表示されていた。もはや暇潰しのレベルをはるかに超えてカウスタストップしているくらいだが——私はなぜか楽しめた。

最後の一枚、実が取れて青空を見上げるもさ男がこんな台詞をのたまっていた。

『暇を暇と感じない君こそ、樹上生活者だ!』

……やられた。

影之兎チャモ

「教科書」「ノート」「プリント」

テストが近く久しぶりに登校した。

教科書やプリントの絵に髭などを添え、泥のような時間を過ごす。本を読めば事足りるのに、どうして義務という名の下に束縛されなければならいんだろう。

漸くチャイムが鳴り、俺は立ち上がる。

廊下を出る寸前に呼ばれ振り向くと、見知らぬ女が立っていた。

「あんまりこないでしょ」

「それがどうしたの」

「テスト困るんじゃないかと思って」

そういつて差し出された、ノート。断ろうとしたがあまりに真剣なため、思わず受け取ってしまった。

帰宅後やることもなく、気まぐれでノートを開ける。全く教科書通りの内容で、呆れながら頁を捲っていると、あることに気付いた。右下の空白にホネ人間がいる。パラパラ漫画か。

「つ、ま、ら、ん」

そう言うバラバラになって飛び散った。ノートを閉じて表紙を確認すると、名があった。あの女は貸し出し用と間違い、自分のノートを俺に渡したのだ。

「つ、ま、ら、ん」

だったら逃げればいいのに、思ったと同時にまた飛び散った。ノートの隅、それ以上出ることのないホネだけがある。

和成創一

「烏龍茶」「パズル」「天使」

人の心はミステリーである。パズルである。そして必ず、答えがある。

——なんて、カッコいいことを考えていた僕だけど。

「秀治、俺……やっぱ駄目だった。天使だと思ってたのが、いけなかったのかな……」

親友にこう言われたら、ああ自分が考えてた事なんて所詮ガキのたわごとなんだナアと思ってしまう。

だってさ、僕は何て答えればいいんだ？ こんな真剣でつらそうな相手に。「天使なんてダサ」って突っ込むか？ そう言う野郎はむしろ僕が許さん。

女の子に出会った。恋をした。そして破れた。それが答え、取る

に足りない単純なパズルの解——つい数秒前の僕ならそう思っていただろう。

ふざけんな、僕。

「とりあえず……飲む、か？」

バス用にとっておいた全財産を使い手に入れた烏龍茶。ホットを選んだら、本当に一円もなくなった。ついでにかける言葉もなくなった。やはり僕はガキだった。

ただ、思う。今日ぐらい、ケチでインテリな自分とさよならしよう、と。

バスが来ても動かない僕の隣で、友は静かに泣き始めた。

Yoshina

「手紙」「湿布」「万歩計」

「あれ？河本さん、あなた25歳ですか？」

「？ええ、そうですけど」

「ですよねー…」

私が首をかしげると、旅券事務所の職員は住基ネットが映し出されているパソコンをまじまじと見つめる。

「あのー何か？」

心配になって恐る恐る尋ねてみると、

「あなた56歳になってますよ」

「はあ!？」

思わず身を乗り出す私25歳。

「恐らくこれ導入した時に入力ミスがあったんでしょね。区役所で申請したら直せますよ」

想定外の事実に関を引きつらせる。よりにもよって56歳とは。そういえば最近湿布や万歩計を売り込むダイレクトメールが沢山来てたなあと思い出した。まさか原因はこれか。

「あと1枚資料の添付を忘れているので、また手紙で送ってください」

「……わかりました」

脱力感いっぱいです事務所を出て帰路に着く。パスポートを申請しなければ私は当分56歳だったのか。あまり歓迎したくない誤差である。家に着くと郵便受けを覗く。やはりダイレクトメールが。

『中国3000年の奇跡！これを飲めばあなたも10歳若返る！！』

……いや、10歳言うたら中学生やん。

明日区役所へ行こうと私は決意するのだった。

翻弄（後書き）

即興小説傑作集第二弾、いかがだったでしょうか？

心に残る作品があった、という方は作者様の名前を添えて感想を送るか、作者様のメールアドレスをご利用ください。

また、即興小説の活動は現在も「小説家になろう」秘密基地」のみんなの掲示板にて行われています。傑作集には収録されていない作品もありますので、ぜひご覧下さい。参加もお待ちしております。

それでは、今回参加していただいた方々のご紹介を最後に添えさせて頂きます。

- マグロ頭さま (W6336A)
- AKIRAさま (W7052A)
- yoshinaさま (W6246A)
- 更紗ありさま (W3245A)
- 影之兎チャモさま (W6270A)
- 松原志央さま (W5773A)
- ともゆき様 (S0003A)
- 和成創一さま (W8588A)
- ゆうな様 (W4620A)

ご協力、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4756b/>

即興小説傑作集第二弾

2010年10月8日13時33分発行